

ルウィ系諸言語における動詞過去語尾の起源

吉田和彦

I. はじめに

同系統に属する諸言語を比較することによって祖語を再建し、祖語の段階から各分派諸言語がどのような歴史を経て成立したのかを明らかにすることは、比較言語学の最も重要な課題である。この祖語の再建という課題に向けて、最も古い時代に記録された文献資料を有する言語が大きな役割を果たすことは言うまでもない。このような言語には、祖語に遡ると考えられる言語学的特徴が保存されていることが少なくないからである。この意味で、今世紀初頭の小アジアでのヒッタイト語の発見は、印欧語比較言語学の進展にとって画期的な出来事であった。何故なら、ヒッタイト語は、当時知られていたギリシア語、ラテン語、サンスクリット語といった重要言語よりも、さらにいっそう古い時期に記録されているからである(古期ヒッタイト語のオリジナルな楔形文字粘土板は紀元前16世紀にまで遡る)。

古代アナトリアにおいて使用されていた印欧語は、ヒッタイト語に限られていたわけではない。現在までに印欧語族のアナトリア語派を構成する言語として認められているものには、ヒッタイト語以外に、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語、パラ語、リュディア語などがある。しかしながら、印欧語比較研究において問題にされるのは、ほとんどの場合ヒッタイト語であって、他の諸言語は無視される傾向があった。その理由は明らかである。圧倒的に豊富なヒッタイト語の資料に比べて、他のアナトリア諸語の断片的な資料は、祖語の再建という目標に対して何ら貢献するところがないように受け取られていたからである。ところが、この状況は近年大きく変わった。うへの諸言語で記録された多くの新資料が発掘され、それにともない、個々の言語の解読作業やデータの言語学的解釈がめざましく進展したからである。

このような発展は、とりわけルウィ系の諸言語、すなわち、象形文字ルウィ語、リュキア

語、そして楔形文字ルウィ語において最も顕著にみられる。現在、かなり解読作業が進んでいるとはいえ、まだ多くの点で未解読である象形文字ルウィ語の研究においては、Hawkins, Morpurgo-Davies and Neumann [1974] が、それまで Laroche [1960] や Meriggi [1966-75] などによって与えられていた文字の音価のいくつかを、新たな根拠に基づいて、根本的に読み改めた。その結果、従来、象形文字ヒッタイト語と呼ばれていたこの言語が、ヒッタイト語ではなく、ルウィ系の言語であることが証明された。この象形文字ルウィ語で書かれた資料は、近年もなおアナトリア南東部やシリア北部で発掘されており、これまでさまざまな雑誌や研究書に個別的に報告されてきた。これらの紀元前1千年紀のすべての資料は、近い将来、Hawkins [forthcoming] として包括的な形で出版されることになっている¹⁾。リュキア語に関しては、1973年にクサントス近郊のレートーオンで発見された3言語併用碑文が Laroche [1979] によって公刊され、リュキア語の性格がよりいっそう明らかにされた。また、語彙集も Melchert [1989] によって出版されている。楔形文字ルウィ語については、すべてのテキストが Starke [1985] として非常に有用な単行本の形でまとめられている。これに続く Starke [1990] は、名詞形態論を扱った大部な研究書である。以上のルウィ系の3つの言語に比べて、パラ語とリュディア語の研究の進展はそれほどめざましいものではないが、堅実な研究成果が積み重ねられている。

以上に代表される個々のアナトリア諸語の近年の研究成果によって、以前は名のみであったアナトリア比較研究は、ようやく本格的な段階に到達したと言えるだろう。すなわち、もはやヒッタイト語だけが重要なのではなく、すべてのアナトリア諸語が祖語の再建という問題に対して有機的に貢献する時期が到来したのである。そして、新たに再構成されるアナトリア祖語は、印欧語族に属する重要語派の最も古い状態を表すものとして、印欧語比較言語学の将来にも大きな影響を与えるであろう。

II. 問題点の所在

アナトリア諸語の一般的な文法書によれば、動詞の過去形の基本語尾は次頁の表の通りである。

パラ語、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語においては、確実に1人称および2人称複数²⁾の能動態と認定できる形式は記録されていない³⁾。これは断片的な資料しか持たない言語には、当然予想されることである。しかしながら、この表で注目すべき点は、ヒッタイト語以外の言語で中動態の過去形が完全に欠けていることである³⁾。ヒッタイト語では、ほとんどの語尾が *-ti* でマークされているが、本質的には印欧祖語の

	ヒッタイト語	ヒッタイト語	パラール語	楔形文字ルウイ語	象形文字ルウイ語	リュキア語
	<i>mi</i> -動詞	<i>hi</i> -動詞				
能動態単数 1 人称	-(n)un	-hun	-ha	-ha	-ha	-ḫa, -ḫā, -gā
2 人称	-š	-ta	-š	-š		
3 人称	-t, -ta	-š	-t, -ta	-ta, -tta	-ta, -ra	-te, -tē, -de, -dē
複数 1 人称	-uen					
2 人称	-ten					
3 人称	-er		-nta	-nta	- ⁿ ta	- ⁿ te, - ⁿ tē
中動態単数 1 人称	-(ḫa)ḫat(i)					
2 人称	-ta(ti), -tat					
3 人称	-tat(i), -at(i)					
複数 1 人称	-yaštat					
2 人称	-dumat					
3 人称	-antat(i)					

中動態の語尾を継承している(1 sg. -ḫa < **-h₂e*, 2 sg. -ta < **-th₂e*, 3 sg. -(t)a < **-(t)o*, 1 pl. -yašta < **-medh₂e*, 2 pl. -duma < **-dh₂e*, 3 pl. -anta < **-(e)nto⁴¹*)。ここで問題となるのは、ヒッタイト語以外のアナトリア諸語で(少なくとも3人称において)中動態過去形が記録に残っていないのは単に偶然なのか、それともこれらの言語は実際に中動態過去形を持っていなかったのかということである⁵⁾。本稿の目的は、記録されている過去形の大部分を占める3人称の動詞語尾の先史を比較研究によって探求することによって、この問題を解明することにある。特に重要となるのは、アナトリア祖語およびルウイ祖語の段階に起こったと想定されるいくつかの音韻変化と形態変化の相対的な順序関係(relative chronology)である⁶⁾。

Ⅲ. 従来の説

問題となる3人称単数と複数の動詞過去語尾に関して、一般の文法書はそれらを能動態のパラダイムのところで扱っている⁷⁾。これは、それらが印欧祖語の能動態2次語尾に由来することを示唆している。この見方を最も明示的に表したのはEichner[1975: 79-80]であり、以下に彼の見方の要点を示す⁸⁾。

Eichnerによれば、アナトリア祖語において語末の-tは子音の直後で脱落した。しかしながら、能動態過去の3 sg. **-t*と3 pl. **-nt*は、彼の言う「補助母音(Stützvokal)a [a]あ

るいは[ə]」に支えられて、それぞれ *-ta* と *-nta* という形で *t* を復活した (e.g. 3 sg. **epta* “he took” ← **ep* < **ept*, **appanta* “they took” ← **appan* < **appant*)。この *t* の復活は、うえの音韻変化を蒙らなかった母音語幹動詞からの類推によるものである。次に、ルウィ祖語の段階で語末の *-t* の脱落が、今度は母音の直後で生じた。ここでもまた、*t* は *-ta* として復活したが、今回は逆に子音語幹動詞 (e.g. 楔形文字ルウィ語 *āsta* “he was”) から類推が働いた (e.g. 楔形文字ルウィ語 *ayita* “he came” ← **ayi* < **ayit*)。

この見方は思弁的なところが多く、それを支持する根拠が乏しい。まず第一に、Eichner はアナトリア祖語において語末の *-t* がすべての子音の直後で落ちたと主張しているが、実際にはこの変化規則が働いた唯一の確実な環境は *n* の直後である (e.g. ヒッタイト語、中性単数主格・対格 *hūman* “all” vs. 単数属格 *hūmandas*, 楔形文字ルウィ語、共通性単数呼格 ^U*-an* = ^U*Tarḫuḫan* vs. 単数主格 ^U*Tarḫunza*)。 *n* ___ # 以外の環境で語末の *-t* が脱落したことを支持する根拠は見あたらない⁹⁾。従って、本稿でのデータの解釈が正しいなら、子音語幹動詞の能動態3人称過去語尾が起源的な **-t* を直接伝承しているとみなすことも十分に可能である。この場合には、補助母音 *a* による説明は全く不要である。

Oettinger [1979 : 9, note 6] は、補助母音 *a* の存在は *e-ip-ta* “he took” (*e-pa-at* とは決して綴られていない) や *li-in-kat-ta* “he swore” (同様に、*li-in-ka-at* とは決して綴られていない) といったヒッタイト語のスペリングによって支持されると論じている。しかしながら、この理由づけも決定的なものではない。うえの2つの例の綴り方については、少なくとも別の解釈が可能である。最初の例については、*ēp-* は子音語幹動詞であるために、語幹末の *p* と語尾 *-t* との間に母音を差しはさむことを避けたと考えることも可能である (楔形文字の書記法では、語頭と語尾の2子音連続や語中の3子音連続がダミーの母音無しでは書き表せないことに注意されたい)。

2番目の例については、1番目の例とは違った説明が必要になる。アナトリア祖語の時期に語末の閉鎖音が弱化 (lenition) したことはよく知られている (e.g. ヒッタイト語 *pait-as* “went he”。 *-as* が enclitic であり、3人称単数の能動態過去語尾が母音間でシングルで綴られていることに注意されたい¹⁰⁾)。この変化は母音の直後の位置で起こったに違いない。何故なら、弱化は先行する母音からの同化現象として音声学的に説明されるからである。たとえば、オスク・ウンブリア語の *fusid* “foret” に対する *fust* “erit”, および古ラテン語において母音の後の3人称単数2次語尾 *-d* < **-t* (e.g. *esed* “erit”, *feced* “fecit”, *sied* “sit”) が有声であるのに対して、子音の後では **-t* が落ちること (e.g. *lac* “milk” < **lact*) を比べられたい¹¹⁾)。従って、*li-in-kat-ta* においては、子音語幹動詞 *link-* に直

接続く語末の歯茎音が弱化を受けていないことを示すために、書記が *li-in-kat* の後に *-ta* という文字を付けて、*t* をダブルにしたという解釈が成り立つ¹²⁾。

いずれにせよ、補助母音による説明はそれを支持する独自の根拠があるようには思えない。以下においては、補助母音による説明よりも有力と思える別の見方があることを示そうと思う。

IV. 3人称複数過去

楔形文字ルウィ語の1人称単数、3人称単数および3人称複数の過去語尾が形式的に印欧祖語の中動態語尾から来源するのではないかという推測は、必ずしも新しいものではない¹³⁾。Melchert [forthcoming a] はリュキア語の母音組織の観点から、はじめてこの見方を支持する根拠を提出した(少なくとも3人称に関して)。彼はアナトリア諸語の間には次の2つの母音の対応関係があることを指摘した。(1)リュキア語 *e*, ヒッタイト語 *a*, 楔形文字ルウィ語 *a* < 印欧祖語 **o*, (2)リュキア語 *a*, ヒッタイト語 *a*, 楔形文字ルウィ語 *a* < 印欧祖語 **a*。リュキア語の3人称過去単数 *-te/-tē* および複数 *-te/-tē* は、それぞれ楔形文字ルウィ語の *-tta* と *-nta* に対応するため、彼はこれらの語尾の祖形は **-to* と **-nto* であると主張した。これらの祖形は印欧祖語の3人称単数と複数の中動態語尾に合致する。本節と次節において、ルウィ諸語の3人称単数と3人称複数の過去語尾の形式が起源的に印欧祖語の中動態語尾に遡るという見方が正しいことを、違った観点から証明したい¹⁴⁾。

第2節に示した動詞過去語尾の表の能動態複数3人称のところを見ると、ヒッタイト語の *-er* に対して、他の諸言語は *-nt-* という要素を含む語尾を持っている。楔形文字ルウィ語 *-nta* (e.g. *aqinta* “they came”), 象形文字ルウィ語 *-ta* (e.g. *tu-tá* “they put”), Kululu 4, 1 §4), リュキア語 *-te/-tē* (e.g. *pijēte, pijētē* “they gave”), パラー語 *-nta* (e.g. *lukinta* “they divided”)。この対応に基づいて、アナトリア祖語に **-nta* を建て、ヒッタイト語の先史において **-nta* が *-er* に取って代わられたと考えることは、一見したところ全く自然である。しかしながら、この見方はヒッタイト語内部の興味深い事実を合理的に説明することができない。

筆者はすでに別のところで (Yoshida [1987b], [1990a : chapter 4]), アナトリア祖語の語末の *-r* は直前にアクセントが落ちない場合には脱落するという音変化を提案した。この音変化は、*r* の要素を持つ中動態動詞現在や *r/n-* 語幹名詞のさまざまな形式のアナトリア諸語における独自の分布を説明するために必要である。この語末の *-r* の消失が

生じたと考えうるもうひとつの潜在的なケースが、この節で問題となるヒッタイト語の3人称複数過去の語尾 *-er* である¹⁵⁾。

ところで、最近 Neu [1989] はヒッタイト語の3人称複数過去の語尾として、一般的な *-er* 以外に *-ar* という非常に稀な形式があることを指摘した。すなわち、ハッティ起源と考えられる形式や音声的解釈が曖昧な形式を除いても、*-ar* でマークされる例は少なくとも3つある。*ša-ú-ši-ja-ar* “they investigated” Maşat-Brief 6, Rs. 22, *ḥa-a-ni-ja-ra-at* “they drew it” Bo 6472, 12, *ú-e-mi-ja-ar* “they found” KUB XVII 10 I 37。非常に重要なことに、これらは古い時期のヒッタイト語で書かれた粘土板に記録されている。これらの貴重な例は、明らかに *-er* という語尾の一般化を受けなかった残存形式とみなすことができるが、3人称複数過去の語尾の先史についてより正確な理解を与えてくれる。2つの語尾、*-er* と *-ar* は本来の量的母音交替を反映するもので、それぞれアクセントの落ちる正常階梯の語尾 **-ér* とアクセントの落ちない零階梯の語尾 **-ɛr* に遡る¹⁶⁾。アクセントの落ちない音節の後で語末の *-r* が脱落する変化が生じた時、**-ér* はアクセントを持っているために *-r* を保持した。他方、**-ɛr* はこの変化の後で **-ar* になった¹⁷⁾。従って、ヒッタイト語の3人称複数過去の語尾は、語末の *-r* の脱落規則が適用される環境になかったことが分かる。

ヒッタイト語の3人称複数過去の語尾である *-er* と *-ar* が語末の *-r* を決して失わなかったことは明らかになったが、ここでわれわれはこの問題と関連してはいるが、別の違った問題に直面する。それは、ヒッタイト語が何故、大多数の動詞がとったと考えられる **-ar* (く **-ɛr*) ではなく、**-er* を一般化したかという問題である。以下において、この問題の解決を試みたい。

動詞形成法において、語幹が幹母音 **-e/o-* で終わるタイプ、いわゆる thematic のタイプが欠けていることは、アナトリア諸語に固有の特徴のひとつである¹⁸⁾。確かに、サンスクリット語の *bhárati* や *tudāti* に相当するようなタイプは、ヒッタイト語には欠けている。しかしながら、**-ske/o-* や **-je/o-* という接辞を持つタイプは数多く見いだされる (e.g. *daškizzi* “he takes repeatedly”, *anizzi* “he carries out”)。さらに重要なことに、これらのタイプの動詞は古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板のなかで、しばしば接辞にいわゆる scriptio plena (母音の重複) の *e* を持っている¹⁹⁾。以下に示すのはその代表例である。

da-aš-ki-e-mi “I take repeatedly” KBo XVII 3 IV 10

da-aš-ki-e-u-e-n[i] “we take repeatedly” KBo XXII 2 Vs. 19

- da-⟨aš-⟩ki-e-ir* “they took repeatedly” KBo VI 2 I 14
da-aš-ki-e-ir “id.” KBo VI 2 I 58
ak-ku-uš-ki-e-ši “you drink repeatedly” KUB XXXI 143 II 16
ak-ku-uš-ki-e-ya-ni “we drink repeatedly” KUB XXXVI 140 Rs. 7
zi-ki-e-it “he placed repeatedly” KBo XXII 2 Vs. 3
- a-ni-e-iz-zi* “he carries out” KUB XXIX 30 II 21
a-ni-⟨f-nu-un⟩ “I carried out” KBo III 22 Rs. 48
ḥa-ri-e-mi “I bury” KBo XVII 1 III 9; KBo XVII 5 II 2
ḥa-ri-e-nu-un “I buried” KBo XVII 3 III 12
ḥa-ap-pa-ri-e-nu-un “I turned over” KBo III 22 Vs. 20

これらの例のいくつかにおいて、*e*という文字はおそらく直前の曖昧な *Ce/i* という文字、および直後の曖昧な *e/iC* という文字を [e] の音価で読むために添えられたのであろう (たとえば, *da-aš-ke/i-e-mi* [daskemi] や *a-ni-e-e-iz-zi* [anyetsi])。いずれにせよ、うへの例において接辞 **-ské-* および **-jé-* にアクセントが落ちたことは確かである。何故なら、アクセントの落ちない **e* はヒッタイト語において *i* で書かれるからである (Melchert [1984a : 104ff.])。thematic のタイプの動詞はパラダイムを通してアクセントの位置が固定しているために、うへの例に代表される動詞の 3 人称複数過去は *-skér* および *-jér* によって特徴づけられていた。すなわち、語末の *-r* の直前にアクセントが落ちていたのである²⁰⁾。

-sker および *-jer* という語尾が、より古い **-sként* および **-jént* という語尾に形態的に取って代わったものであることは疑いない。何故なら、**-ské-* や **-je-* という接辞を持つ動詞が *mi-* 活用動詞に属するのに対して、*-er* という語尾は本来、*hi-* 動詞の特徴であったからである。本来の *hi-* 動詞語尾 **-er* が *mi-* 動詞の 3 人称複数過去形に拡張されたのは、アナトリア祖語の時期であったに違いない。そして遅くとも、語末の **-r* が **-ar* に変化する以前でなければならない。このように考えないと、ヒッタイト語において *-er* が **-ar* (<**-r*) に代わって一般化されるための主たる拠りどころが失われてしまう。**-er* は、*mi-* 動詞語尾の **-ant* を完全に駆逐したのではなく、アナトリア祖語の後期において 3 人称複数過去語尾として **-er* と **-ant* の両方が存在したと考えられる²¹⁾。 *hi-* 動詞語尾 **-er* の拡張を蒙った動詞のなかには、**-ské/o-* や **-je/o-* という接辞を持つ thematic のタイプが

含まれていた。そしてこれらのタイプの数多くの動詞は、接辞にアクセントを有していた。このようにして造られた **-skér* および **-jér* によって特徴づけられる動詞は、語尾にアクセントを持つ *-i*-動詞 (e.g. *piér* “they gave”, *halziér* “they called”, *išpiér* “they sated themselves”) とともに、ヒッタイト語の先史において *-er* が一般化されるための信頼できる源を提供する(さきで述べた3つの動詞, *šausiḫar*, *hāniḫar*, *ḡemiḫar* はこの一般化を受けなかった数少ない例である)。これまでの議論は、主としてヒッタイト語からの根拠に基づいていたのであるが、後期アナトリア祖語には3人称複数過去の *mi*-動詞語尾として、**-ant* だけでなく、*hi*-動詞から広がった **-er* も存在していたことが明らかになった。以下では、これらの再建された語尾から他のアナトリア諸語のデータを、矛盾なくどのように説明できるかを示したい。

第3節で、アナトリア祖語において語末の *-t* が *n* の直後で脱落したことを観察した。この変化規則は、*mi*-動詞が取っていた2つの語尾 **-ant* と **-er* のうち、前者にも適用され、新しく **-an* という語尾が造られた。その結果、われわれが再建することのできる最も後期のアナトリア祖語においては、動詞の3人称複数過去に関して、*mi*-動詞は **-an* と **-er* によって、*hi*-動詞は **-er* と **-j* によって、中動態動詞は **-anta* という語尾によって特徴づけられていたことが分かる²²⁾。この状態は、ヒッタイト語が他の言語から分離した時点においても保たれ、ヒッタイト語はその先史において **-er* という語尾を *mi*-動詞にも、*hi*-動詞にも一般化した。他方、ヒッタイト語以外のアナトリア諸語はこの点で違った方向の変化を辿った。うへの3つの後期アナトリア祖語の能動態動詞語尾のうち、**-an* はその機能的位置が不明瞭であるために、中動態の **-anta* という語尾のヴァリエントと再解釈され、**-anta* が3人称複数過去を表す唯一の語尾として一般化された。その結果、**-er* と **-j* という語尾が完全に駆逐され、**-anta* は共時的に能動の機能も果たすようになった²³⁾。このようにして成立したのが、楔形文字ルウィ語 *-nta*、象形文字ルウィ語 *-ta*、リュキア語 *-te*, *-tē* である。

**-anta* が **-an* に取って代わった形態的変化がルウィ祖語において起こったのか、それともより以前の時期に遡るのかは決定できない(ただし、ヒッタイト語には起こっていないために、アナトリア祖語に遡らないことは間違いない)。パラ語の *-nta* をルウィ諸語と同様に中動態語尾による編入と考えるのは素直な見方であるが、以下のような別の解釈も十分可能である。パラ語の3人称単数過去語尾は常に *-Vt* という文字で表されており、それは能動態の本来の語尾 **-t* を伝承するものに違いない²⁴⁾。従って、3人称複数 *-nta* は次の類推の比例式に基づいて、アナトリア祖語の **-an* に再び歯茎閉鎖音を導入

した能動の[-nt] (あるいは[-nd])を表すのかもしれない。3人称単数現在 *-ti* : 3人称単数過去 *-t* (あるいは *-d*) = 3人称複数現在 *-nti* : X, X = *-nt* (あるいは *-nd*)。この解釈が正しいならば、アナトリア祖語の時期に3人称複数過去の動詞語尾に補助母音が導入されたとする Eichner と Oettinger の見方はその論拠を失うことになる。

V. 3人称単数過去

3人称単数過去語尾の先史については多くの困難な問題が含まれている。そのうち本稿に直接関係する問題は、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語の *hi*-動詞の3人称単数過去語尾が、母音間でそれぞれ常に *-tt* (あるいは *-dd*), *-t*, *-t* でマークされているという事実である。たとえば、楔形文字ルウィ語 *pí-(i)-ja-at-ta* “he gave”, 象形文字ルウィ語 *pi-ia-ta*, リュキア語 *pijete, pijetē*, あるいは楔形文字ルウィ語 *du-ú-ya-at-ta* “he put”, 象形文字ルウィ語 *tu-wa/i-ta, tu-ta*, リュキア語 *turwete, turwetē* などである²⁵⁾。これは Morpurgo Davies [1982/3 : 256ff.] による指摘である。彼女はまた、ルウィ諸語の *mi*-動詞の3人称単数過去語尾に、母音間で *hi*-動詞の場合とは異なる別の対応関係があることに気づいた。すなわち、楔形文字ルウィ語 *-t* (あるいは *-d*), 象形文字ルウィ語 *-r/-t*, リュキア語 *-d* という対応である。たとえば、楔形文字ルウィ語 *a-ti* “he makes”, *a-ta, a-da, a-a-ta*, 象形文字ルウィ語 *á-á+ra/i, á-ia-ti-i, á-tà-*, リュキア語 *adi, edi, ade, ede*, あるいは楔形文字ルウィ語 *a-ú-i-ti* “he comes”, *a-ú-i-ta*, 象形文字ルウィ語 ‘PES’-*wa/i+ra/i, PES-wa/i-ti, á-wa/i-ta* などである。これらの対応を説明するために Morpurgo Davies は、 $\acute{V}tV \rightarrow \acute{V}dV$ という子音の弱化規則を提案した²⁶⁾。この規則に従うと、うへの例における弱化した歯茎音は先行するアクセントのある長母音によって生じた(楔形文字ルウィ語 *ati* < **iéhi-ti*, 楔形文字ルウィ語 *ayita* < **au-hiéi-ti*)²⁷⁾。彼女はまたもうひとつ別の弱化規則 $\acute{V}CVtV \rightarrow \acute{V}CVDV$ を提案した。この規則は、楔形文字ルウィ語 *du-ú-pi-ti* “he strikes”, 象形文字ルウィ語 *tu-pi-ri+i, tu-pi-ti*, リュキア語 *tubidi* という接辞 **-je/o-* を持った動詞の語尾の弱化した歯茎音を説明するためのものである。これらの例は、**-je-* を持つ祖形に遡る *a-ri-it-ti* “?” とは異なり、**-je-* を持つ祖形に遡ると考えられる。

mi-動詞の3人称単数過去語尾における弱化を受けた歯茎音の分布に関する、うへの Morpurgo Davies の説明は説得性の高いものであるが、それでもなお、何故 *hi*-動詞の3人称単数過去語尾において同じような分布が全くみられないのかが問題として残る。*hi*-動詞においては、うへの2つの規則が適用されるための位置にアクセントがなかったために、弱化規則が働かなかったと考えるのは無理がある。また、弱化規則を受けなかった

語尾が後に *hi*-動詞に一般化されたために, *mi*-動詞にみられるようなコントラストが完全に失われてしまったという可能性も同様にありえない。

ここで, ルウィ諸語に観察されるこの問題をもう少し広い視点, すなわちアナトリア語派全体および印欧語族の視点に立って考えてみたい。ヒッタイト語の *hi*-活用動詞の3人称単数過去語尾として, Friedrich [1960: 77] は *-š*, *-ta*, *-šta* の3つをあげている。このうち最も古い語尾は *-š* であると言える。古期ヒッタイト語のオリジナルの粘土板には, 以下のような *hi*-動詞の3人称単数過去形が含まれている²⁸⁾。

- a-ak-ki-iš* “he died” KBo VI 2 IV 3
a-ar-ša “he arrived” KBo XXII 2 Rs. 7
da-[a-aš] “he took” KBo III 22 Vs. 6
pa-iš “he gave” KBo III 22 Rs. 47; KBo XXII 2 Vs. 17
tar-na-aš “he left” KBo XXII 2 Vs. 3; KBo XVII 1 II 5; KBo XVII 3 III 5
ta-a-li-iš “he left” KBo XXII 2 Rs. 14
šu-un-na-aš “he filled” KBo XXII 2 Vs. 2
a-ra-iš “he raised” KBo III 22 Vs. 12
ja-an-ni-iš “he marched” KBo XXII 2 Rs. 7
pí-e-da-aš “he carried” KBo XXII 2 Vs. 4; KBo III 22 Vs. 40
ha-a-aš-ta “he begged” KBo XXII 2 Vs. 1; 6; 12; 13
tak-ki-iš-ta “he undertook” KBo III 22 Vs. 8

うへの例のうち, *arāi-* と *iḡannāi-* を Friedrich は *mi*-動詞として扱っているが, それらは両方とも本来 *hi*-動詞に属していた²⁹⁾。このリストから明らかなように, 最後の2つ以外の全ての例は *-š* という語尾によって特徴づけられている。最後の2例, *hāšta* と *takkišta* は *-ta* でマークされているが, 両者ともに語幹が *-š* で終わっていることに注意されたい。これらも本来 **-s* という語尾を取っていたが, 語末のダブルの **-s-s* はその機能的な位置が不明瞭であるという理由で, 3人称単数過去であることを明確に示すために, *mi*-動詞語尾 *-ta* が *hi*-動詞語尾 *-š* に取って代わったと考えることは全く自然である。古期ヒッタイト語において *-š* が *hi*-動詞の3人称単数過去形に顕著に結びついているといううえでの観察から, *hi*-動詞過去の3人称単数形の起源的な語尾は *-š* であったと言える。この見方は, 以下に示す後の時期のヒッタイト語の文書に現れる, *-ta* や *-šta* でマー

クされている 3 人称単数過去の形式から正当化されるであろう。

ak-ta KUB XIII 3 III 35(OH++ = 古期ヒッタイト語テキストの後期ヒッタイト語によるコピー)

pa-iš-ta KBo III 4 II 12(NH = 後期ヒッタイト語の歴史文書³⁰⁾)

pí-iš-ta KBo III 4 III 85(NH)

pí-eš-ta KUB I 1 I 18(NH)

da-a-li-iš-ta KUB XIV 16 I 11(NH)

šu-un-ni-iš-ta KUB I 1 I 79(NH)

うえの例で使われている 4 つの動詞, *ak-*, *pái-*, *dala-*, *šunna-* は, 先に見た古期ヒッタイト語の 3 人称単数過去形のリストのなかでは, 語尾として *-š* を取っていた。ところが, 後の時期のヒッタイト語では *-ta* あるいは *-šta* でマークされているのである。このことから, Friedrich があげている 3 つの語尾のうち最も古いのは *-š* であり, *-ta* と *-šta* はおそらくヒッタイト語内部の歴史で誕生した新しい形であることが分かる³¹⁾。これらの語尾の形態的な革新は, 本来の語尾 *-š* の機能的な位置づけが十分に明瞭ではなかったことを強く示唆している。

ヒッタイト語の *hi*-動詞の過去のパラダイムにおいて *š* の要素が現れるのは, 3 人称単数形に限られているのであるが, この *š* の分布はヒッタイト語だけに特有の現象ではない。これと全く同じ現象がトカラ語過去第 3 類においてもみられる。そこでは, *š* の要素はやはり 3 人称単数形(e.g. トカラ語 A *prakās* “he asked”, トカラ語 B *preksa*)以外の能動態のパラダイムには欠けている。ヒッタイト語とトカラ語に見られる完全な並行性に基づいて, Watkins [1962 : 67] と Jasanoff [1988 : 56f.] はこの *s* の分布がより古い状態を反映しているものと考えた。この見方を採るなら, ヒッタイト語の *hi*-動詞の 3 人称単数過去形の *š* は印欧祖語に遡り, それゆえにアナトリア祖語の特徴であったことになる。このような視点に立つならば, うえで論じたルウイ諸語の *hi*-動詞の 3 人称単数過去語尾, すなわち, 楔形文字ルウイ語 *-tta*, 象形文字ルウイ語(*-ra* と交替しない) *-ta*, リュキア語 *-te*, *-tē* は革新形であり, 起源的な **-s* に取って代わった新しい語尾であることが分かる。ルウイ祖語に起こったこの語尾形式の交替は, 同じくルウイ祖語に起こったとすでに論じたアクセントのある長母音の後, およびアクセントのない短母音間で生じた歯茎音の弱化現象より後に起こったに違いない。そう考えないと, 弱化した歯茎音が *hi*-動詞の 3 人

称単数過去語尾に存在しないことが説明できない³²⁾。

ルウィ祖語において、本来の *hi*-動詞の 3 人称単数過去語尾 **-s* が **-ta* に取って代わられたプロセスは、以下のように考えるのが最も合理的である。次の例から明らかのように、ルウィ祖語の段階で語末の歯茎音は消失した。楔形文字ルウィ語 *malli* “mead” < **malli* (cf. ヒッタイト語 *melit*)。関係代名詞の中性主格・対格単数, 楔形文字ルウィ語 *kui*, リュキア語 *ti* (cf. ヒッタイト語 *kuit*)。指示代名詞の中性主格・対格単数, 象形文字ルウィ語 *apa* (cf. ヒッタイト語 *apāt*)。この音変化は *mi*-動詞の 3 人称単数過去語尾にも作用した。第 4 節で考察した 3 人称複数過去語尾の先史において、音変化によって造られた不明瞭な *mi*-動詞の語尾 **-an* (< **-ant*) に代わって中動態語尾 **-anta* が能動態のパラダイムに編入したのと同様に、語末の歯茎音の消失によって生じた語尾のない形式に代わって、3 人称単数過去の明示的なマーカーとして中動態の語尾 [**-ta*], あるいは [**-da*] が *mi*-動詞のパラダイムに編入された³³⁾。この編入に関しては、次の類推による比例式が関与していたに違いない。 [**-nti*] : [**-ti*] : [**-di*] (現在) = [**-nta*] : X_1 : X_2 (過去)。 X_1 = [**-ta*], X_2 = [**-da*]³⁴⁾。3 人称単数過去語尾の歯茎音が弱化しているか、いないかは、対応する現在形によって決定されるのである。こう考えると、*mi*-動詞の 3 人称単数語尾において、現在形と過去形の歯茎音が常に一致していることがごく自然に理解できる (e.g. 楔形文字ルウィ語, 現在 *ati*, 過去 *ata* (*ada*) vs. 現在 *aritti*, 過去 *aritta*)³⁵⁾。 *hi*-動詞の 3 人称単数過去形にも、*mi*-動詞の場合に類似した形態の変化が起こった。つまり、本来の語尾 **-s* の機能的位置が不明瞭であるために、 [**-ta*] と [**-da*] のうちの無標の中動態の語尾 [**-ta*] が **-s* に取って代わり、一般化されたのである³⁶⁾。弱化を受けていない歯茎音を持つ語尾は、アクセントの落ちる短母音の後だけでなく、子音の後にも見いだされる。

パラ語の 3 人称単数過去形は、すでに前節で見たように、実質的には母音語幹動詞に限られていて、*-Vi* という音節文字で終わっている (e.g. *lu-ki-i-it* “he devided”)。母音語幹動詞の 3 人称過去形が *-Vi* という文字でマークされるというパターンは、ヒッタイト語の *mi*-動詞の場合と同様である。さらに、ルウィ祖語で 3 人称単数の中動態過去語尾を能動態のパラダイムに編入させる動機となった語末の歯茎音の脱落が、パラ語には起こらなかった³⁷⁾、この *-t* という語尾は能動態語尾を継承するものと考えられる³⁸⁾。

VI. 終わりに

第 2 節で提起された問題にもう一度答えることによって、本稿を終えたい。3 人称単数と 3 人称複数に関する限り、ヒッタイト語以外のアナトリアの諸言語で中動態の過去

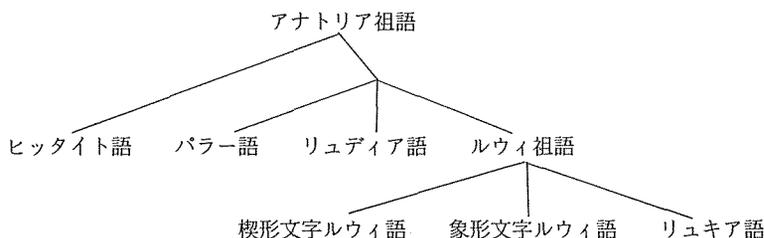
形が欠けているのは決して偶然ではなく、言語学的な要因によるのである³⁹⁾。ルウィ諸語においては、能動態のパラダイムの3人称の位置に、対応する中動態の語尾が編入した結果と考えられる。3人称単数の過去形については、この編入がルウィ祖語に起きたことは確かである。しかしながら、3人称複数に関しては、それがより以前の時期に遡るかどうかは容易に決定できない。

注

- 1) 1990年12月18日に、ロンドン大学の School of Oriental and African Studies の David Hawkins 氏の研究室を訪れた時、ドイツの Walter de Gruyter 社から出版されることになっている *The Hieroglyphic Luwian Inscriptions of the Iron Age* の最終原稿を見せて頂いた。非常に大部なものであり、4巻本になるという。Hawkins 氏自身は歴史学者であり、言語学者ではないため、そこには歴史比較言語学的な解釈は施されていない。しかしながら、そこで提出されるテキスト、写真、記述的な説明などは、今後の象形文字ルウィ語の研究において不可欠なものになるであろう。
- 2) リュディア語のデータは、あまりに乏しいため、本稿の議論に直接関与するようには思えない。Laroche の楔形文字ルウィ語の文法書 [1959: 142] には、1人称と2人称複数の能動態過去の形式はあげられていない。しかしながら、1人称複数として *hūnaiman* “we entered” KUB IX 31 II 31, 2人称複数として *adaritan* “you fed” KUB IX 31 II 32が記録されている。また、Morpurgo Davies [1980: 86ff.] の分析によると、象形文字ルウィ語には文脈のうえで2人称単数過去を示すと思われる形式がいくつかある (“LOQUI”-) *pu-pa-la-ta* “you wrote” ASSUR a, 2, VIA-*wa/i-ni-ta* “you sent” ASSUR a, 3, “*476. *311(-) *ā-li-ia-ta* “?” ASSUR a, 3)。同様に、彼女は “*69(-) *sa-ha-na* “we missed” ASSUR b, 2; g, 4, “*69(-) *wa/i-xi-ha-na* “?” ASSUR f, 3および MORI-*ha-na* “we died” ASSUR a, 3が *-han* で終わる1人称複数過去形である可能性を示唆している。しかしながら、Carruba [1984] はこれらの形式が1人称複数ではなく、1人称単数であると主張する。象形文字ルウィ語の転写方法については、Hawkins, Morpurgo Davies and Neumann [1974] によって提案されたシステムに従う。
- 3) Melchert [forthcoming b] は、リュキア語の *aḫagā* “I became” (<* *-hzeḥse*) が中動態の過去形を継承していることを説得力のあるやり方で証明した。しかしながら、これまで確証されている中動態過去の形式はこの例のみであり、他の例、特にヒッタイト語で生産的に使われている3人称の例がないのは全く不可解である。
- 4) 印欧祖語に再建される中動態の語尾については、Yoshida [1985] に詳しい。また、ヒッタイト語の中動態過去に付与される要素 *-ti* は、後期ヒッタイト語の中動態現在2人称単数と1人称複数にみられる *-ti* と関係づけられる (Yoshida [1987a])。
- 5) 同様に、ヒッタイト語の能動態動詞において重要な役割を果たす *mi*-動詞と *hi*-動詞の区別も、こ

これらの言語の過去形においては観察されない。

- 6) アナトリア諸語の相互の関係については、まだ必ずしも明確にされていないが、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語そしてリュキア語は非常に密接な関係にあり、アナトリア語派の下位グループを形成していた。これらの言語が分離する以前の段階をルウィ祖語と呼ぶ。



- 7) たとえば, Friedrich et al. [1969 : 324ff., 388ff.], Laroche [1959 : 142], Carruba [1970 : 46]などを参照されたい。
- 8) Eichnerの見方は Oettinger (1979 : 561, note 6)によっても受け入れられている。
- 9) 逆に、語末子音が *n* の後で保持された例としては、命令法 2 人称単数の *šanḫ* “Search!” や複合接辞を持つ *r/n*-語幹名詞の単数属格 *pahḫyenaš* “of fire” などがある。前者は零語尾を取り、子音連続で語幹が終わる (*ša-an-aḫ-mi* ~ *ša-an-ḫa-mi* “I search” というスペリングの揺れに注目された)。後者は proterokinetic タイプの母音交替を示す (**phz(u)uén-s*)。
- 10) よく知られているように、楔形文字の書記法では有声と無声の弁別を体系的に記すことができない。ただ、母音間で子音がシングルで綴られている場合は有声、ダブルで綴られている場合は無声を表す。
- 11) 同様に、古期アイルランド語でも、弱化はすべての母音の直後で生じた。ただし、この場合の弱化は先行母音の継続性という特徴に基づく摩擦化として現れる。
- 12) この立場をとると、*e-ku-ut-ta* “he drank” に対しても同様の説明が与えられる。すなわち、この動詞の 1 人称複数形が (*u* の後で *w* が *m* になる変化を蒙った *e-ku-um-me-ni* ではなく) *e-ku-e-ni* と綴られていることから、*e-ku-ut-ta* は labiovelar が保持されたままであったと推定できる ([*ek^wt*] あるいは [*eg^wt*])。従って、子音の後の *t* が無声であることを示すために、語末の *-ta* が付与されたのであると解釈できる。

楔形文字ルウィ語においては、3 人称単数過去語尾が、母音語幹動詞でも、子音語幹動詞でも、常に *-ta* あるいは *-tta* で綴られている。この状況は、同じ書記法で記録されているヒッタイト語と異なる (ヒッタイト語では、子音語幹の後では *-ta* が、母音語幹の後では *-Vi* が用いられている。e.g. *ku-en-ta* “he smote” vs. *i-ia-at* “he made”)。この問題については以下で詳しく論じたい。

- 13) たとえば, Watkins[1969:174]や Jasanoff[1988:73]。
- 14) 以下においては, 煩雑さを避けるために, アナトリア祖語が 5 母音体系であるという Melchert の説ではなく, 伝統的な 4 母音体系に従う。それは, Melchert の新しい見方が以下の議論に直接影響を与えないからである。
- 15) Eichner[1975:87]と Oettinger[1979:114]は, ヒッタイト語の *-er* をラテン語の完了形の *-ēre* に比定することによって, ヒッタイト語の *-er* の *r* が本来, 語末位置になかったと論じた。しかしながら, 彼らの主張は正当ではない。何故なら, ラテン語の完了の *-ēre* は, 1 人称, 2 人称, 3 人称単数の完了形語尾が起源的に 2 次的な小辞 *-i* でマークされていたのと同様に (1 sg. *-ī*, 2 sg. *-isti*, 3 sg. *-it* < **-ai*, **-[is]tai*, **-e[ɪ]t* < **-hze+i*, **-thze+i*, **-e+i*), **-ēr+i* に遡るからである。
- 16) Neu 自身は *-ar* が **-or* に遡ると考えているが, この見方は支持できない。**-or* という祖形は一般的な母音交替の原理から全く逸脱している。また, 成節的ソナントがアナトリア祖語の段階でなお存続していたことを示す独自の根拠は別個に存在する。
- もちろん, *-er* と *-ar* がその先史の遙か以前の時期に, サンスクリットの完了形語尾 *-ur* やアヴェスタ *-ərəs* と同様に (< **-ʔs*), 次に **-s* を持っていた可能性は十分考えられる。ただし, この問題はここでの議論に直接影響を与えない。ついでながら, ヒッタイト語の *-er* (< **-ér*) と *-ar* (< **-ʔr*) というパターンは, ラテン語の *-ēre* (< **-ēr(+i)* < **-érs*) とインド・イラン祖語の **-ʔs* のパターンと完全に並行的である。
- 17) *-r* の脱落規則が, **-ʔr* > **-ar* の変化に先行して起こったことを示す別の独立した根拠については, Yoshida[1990a:112ff.]をみられたい。
- 18) Lehrman[1985]の包括的な調査によると, 単純接辞 **-e/o-* によって特徴づけられる印欧語起源の thematic のタイプの動詞はアナトリア諸語には一例もない。
- 19) *scriptio plena* は, 古期ヒッタイト語においてアクセントの位置を示すために任意に用いられていた。このことについては, 特に Kimball[1983]を参照されたい。
- 20) 印欧祖語においては, **-s̄ke/o-* および **-je/o-* の使用は現在語幹に限られていた。これらの接辞がヒッタイト語動詞で過去形にも拡張されているのは, 印欧祖語の未完了過去とアオリストがアナトリア祖語において過去という単一のカテゴリーに統合されたことによると考えられる。
- 21) 後で考察するように, 祖語に **-er* と **-ant* の両者を再建するほうが, ヒッタイト語における *-er* と他のアナトリア諸語における **-nta* の相補的な分布が容易に説明できる。
- 22) *acrostatic* タイプの動詞, すなわち母音交替において語尾に決してアクセントが落ちないタイプは, 小さなクラスであるので, ここでは扱わなかった。このタイプの動詞については, Yoshida[1991:368f.]において詳しく考察を試みた。
- 23) これと完全に同一の変化は, リグ・ヴェーダ, ギリシア語そして古ペルシア語にも見られる (Jamison[1979])。たとえば, リグ・ヴェーダにおいては, 能動態 3 人称複数の 2 次語尾を特徴

づける *t* の脱落(*-ant > *-an)が動機となって、中動態の 3 人称複数過去語尾 *-anta* が能動態のパラダイムに編入されたのである。この編入はリグ・ヴェーダでは部分的にのみ起こったが、ルウィ語では **-anta* が一般化された。

- 24) パラー語に在証されている 3 人称単数過去形は、実質的に母音語幹動詞に限られており、子音語幹動詞の確実な例はない。Carruba[1970:53]があげている *ḥalāišta* “?” は曖昧な語形であるし、また *ēšta* “he was” は実際にはヒッタイト語の形式であるかもしれない。
- 25) 2 番目の例については、Morpurgo Davies[1987:207ff.]を参照されたい。
- 26) この規則が働いてから、象形文字ルウィ語はロタシズムを蒙った *-a*(<*-*d*-)で特徴づけられるヴァリエントを持つようになった。
- 27) 同様の規則が Eichner[1973:79ff.]によっても示唆されている。彼はまたこの規則がアナトリア祖語に遡ると主張している。
- 28) ここで示すデータは Yoshida[1990b]に基づいている。
- 29) *arāi-*については Jasanoff[1981]を参照されたい。また *ūannāi-*については、古期ヒッタイト語で記録されている *i-ia-an-na-ab-ḥ[é]* KBo XVII 4 II 8 という形式によって、それが本来 *hi*-動詞であったことが保証される。
- 30) 後期ヒッタイト語の言語学的特徴を決定する際に、歴史文書はきわめて重要な役割を果たす。後期ヒッタイト語の粘土板はすべてオリジナルのテキストではなく、古期、中期ヒッタイト語のテキストのコピーがかなりの割合を占める。ところが、歴史的記録がその実際の出来事に先行することはあり得ないから、後期ヒッタイト語の歴史文書は確実に後期ヒッタイト語の特徴を反映している。
- 31) おそらく、*-ta* は *mi*-動詞起源であり、*-šta* は *-š* と *-ta* の混成の結果であろう。
- 32) もちろん、弱化規則がアナトリア祖語に起こったのであれば、このような変化規則の順序づけを考える必要はない。
- 33) 語末の歯茎音が脱落する変化はリュディア語には起こらなかった(e.g. 関係代名詞、中性主格・対格単数 *qid*)。また、リュディア語では能動態と中動態の 3 人称単数過去形がそれぞれ形式的に明確であるために、中動態語尾が編入される動機は全くない。Eichner[1975:80]は、リュディア語の 3 人称単数過去語尾の *-l* を楔形文字ルウィ語の *-ta*(e.g. *aūita*)に比定しているが、その具体的な根拠はあるようにはみえない。むしろ、リュディア語の *-l* は分詞の接辞から来源したという可能性の方が大きいように思える。
- 34) この説明では、類推が働いた時点において 3 人称複数過去の **-nta* が十分に確立していることが要求される。従って、**(a)nta* が **-an*(<*-*ant*-)に取って代わったのはルウィ祖語より早い段階で、パラー語を含む時期であったという蓋然性が少し高くなる。しかし、すでに論じたように、必ずしもそのように考える必要はない。

- 35) 言うまでもないが、弱化規則の結果を直接保持しているのは現在形であって、過去形は間接的に弱化規則を反映しているが、形態的には革新を受けた形式である。
- 36) *hi*-動詞の3人称単数過去形語尾 **-s* の機能的位置の不明瞭さは、すでにうえで述べた。それは、*-š*→*-ta*, *-š*→*-sta* というヒッタイト語内部の形態的变化からも推察できる。
- 37) たとえば、パラ語の指示代名詞の中性主格・対格単数の *kāt* に対して、これに対応する楔形文字ルウィ語と象形文字ルウィ語の *za* を参照。このパラ語の形式については、Melchert [1984b : 28ff.] をみられたい。
- 38) このことは、パラ語において3人称単数過去の能動態と中動態が形式的に区別されていたことを意味する。中動態の可能性のある形式としては、*šarkutat* “?” KUB XXXV 165 Vs. 6などが考えられる。
- 39) ただし、1人称と2人称に関しては、リュキア語の *axagā* 以外にさらに中動態過去の形式が見つかる可能性が十分にある。

参考文献

Carruba, O.

1970 *Das Palaische Texte, Grammatik, Lexikon*, Wiesbaden.

1984 Nasalization im Anatolischen. *Studi micenei ed egeo-anatolici*, 24, pp. 57-69.

Eichner, H.

1973 Die Etymologie von heth. *mehur*. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, 31, pp. 53-107.

1975 Die Vorgeschichte des hethitischen Verbalsystems. *Flexion und Wortbildung, Akten der V. indogermanischen Gesellschaft*, ed. by H. Rix, Wiesbaden, pp. 71-103.

Friedrich, J.

1960 *Hethitisches Elementarbuch I*, Heidelberg.

Friedrich, J. et al. (eds.)

1969 *Handbuch der Orientalistik, Abteilung I, Band II, Abschnitt 1/2, Lieferung 2: Altkleinasiatische Sprache*, Leiden.

Hawkins, J. D.

forthcoming *The Hieroglyphic Luwian Inscriptions of the Iron Age*, Berlin.

Hawkins, J. D., A. Morpurgo-Davies and G. Neumann.

1974 *Hittite Hieroglyphs and Luwian: New Evidence for Connection*, Göttingen.

Jamison, S. W.

- 1979 Voice Fluctuation in the Rig Veda: Medial *-anta* in Active Paradigms. *Indo-Iranian Journal*, 21, pp. 149-169.

Jasanoff, J.

- 1981 Hittite *arāi-* and Armenian *y-areay*. *Indo-European Studies* (Department of Linguistics, Harvard University), 4, pp. 473-483.
- 1988 The Sigmatic Aorist in Tocharian and Indo-European. *Tocharian and Indo-European Studies*, 2, pp. 52-76.

Kimball, S.

- 1983 *Hittite Plene Writing*. Ph.D. dissertation, University of Pennsylvania.

Laroche, E.

- 1959 *Dictionnaire de la langue louvite*, Paris.
- 1960 *Les hiéroglyphes hittites I*, Paris.
- 1979 L'inscription lycienne. *Fouilles de Xanthos VI*, Paris, pp. 49-127.

Lehrman, A.

- 1985 *Simple Thematic Imperfectives in Anatolian and Indo-European*, Ph.D. dissertation, Yale University.

Melchert, C. H.

- 1984a *Studies in Hittite Historical Phonology*, Göttingen.
- 1984b Notes on Palaic. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung*, 97, pp. 22-43.
- 1989 *Lycian Lexicon*, Chapel Hill.
- forthcoming a Relative Chronology and Anatolian: the Vowel System. *Akten der VIII. Fachtagung der indogermanischen Gesellschaft*, Innsbruck.
- forthcoming b The Middle Voice in Lycian. *Historische Sprachforschung*.

Meriggi, P.

- 1966-75 *Manuale di eteo geroglifico I*, II/1, II/2-3, Roma.

Morpurgo Davies, A.

- 1980 The Personal Endings of the Hieroglyphic Luwian Verb. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung*, 94, pp. 86-108.
- 1982/83 Dentals, Rhotacism and Verbal Endings in the Luwian Languages. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung*, 96, pp. 245-270.
- 1987 'To put' and 'to stand' in the Luwian Languages. *Studies in Memory of Warren Cowgill*, ed. by C. Watkins, Berlin, pp. 205-228.

Neu, E.

1989 Zu einer hethitischen Präteritalendung *-ar*. *Historische Sprachforschung*, 102, pp. 16-20.

Oettinger, N.

1979 *Die Stammbildung des hethitischen Verbuns*, Nürnberg.

Starke, F.

1985 *Die keilschrift-luwischen Texte in Umschrift*, Wiesbaden.

1990 *Untersuchung zur Stammbildung des keilschrift-luwischen Nomens*, Wiesbaden.

Watkins, C.

1962 *Indo-European Origins of the Celtic Verb I: the Sigmatic Aorist*, Dublin.

1969 *Indogermanische Grammatik* III/1, Heidelberg.

Yoshida, K.

1985 Problems in the Mediopassive Endings of Indo-European. *The Journal of the Linguistic Society of Japan*, 88, pp. 68-85.

1987a The Present Mediopassive Endings *-tati* and *-uštati* in Hittite. *die Sprache*, 33, pp. 29-33.

1987b On the Prehistory of Word Final *-r* in Anatolian. *The Journal of the Linguistic Society of Japan*. 91, pp. 40-55.

1990a *The Hittite Mediopassive Endings in -ri*, Berlin.

1990b Recent Developments in Hittite Studies and Their Contribution to Indo-European Comparative Grammar. *Asian Languages and General Linguistics*, eds. by O. Sakiyama et al., Tokyo, pp. 445-466.

1991 Reconstruction of Anatolian Verbal Endings: the Third Person Plural Preterites. *The Journal of Indo-European Studies*, 19, pp. 359-374.